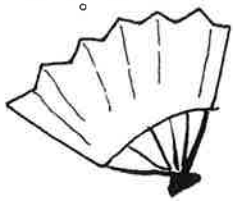
堅田おどりについて

岩田正城

（会員・佐伯市柏江区）

はじめに

堅田おどりといっても、柏江の盆おどりのことが主になると思うが、いささか心に浮んだものを整理してまとめたものである。何等訴えるものもなく、私の理解していることも、必ずしも正鵠を得ているものでもない。いわば、此の記述は、私の解明できない疑問を披瀝して、先輩の方々の御指導を受けて、堅田おどりに対する正しい認識を得たいのが本旨であって、そのように御理解いただけたら、私の喜びこれに過ぎるものはない。



一、かざながし

私の村では、年毎に盆が来ると、昔からの決まりで、八月の十六日には、必ず「かざながし」の盆おどりを催す。しかし、この「かざながし」とは何に由来するものであろうか。私は読んで字の如く、風を流して豊穣の秋を祈ってのおどりであろうかと考えていた。県南地方に「かざながし」といって、正月や盆に風鎮めの祈念をする所もあったというし、また、「風の盆」ということも聞いていた。だが、その「かざながし」という呼び名は「風流（ふりゅう）」という言葉とは何の関係もないものだろうか。「風流」とは、元来優雅とかみやびとかいう程の意味であったとのことであるが、それが発展して華麗に仮装し囃子物を伴って群舞した中世の民間芸能であり、更に、後には趣向をこらした山車や、それをとりまいておどることも、「風流」と言われ、常に新しい趣向が変化して行く芸能で、いろいろなおどりにその形骸が残り、盆おどりもその一つであるということである。

以上、二つの面からいろいろと考えてみたが、やはりいずれとも決めがたい。昔の人達はよく知っていたろう

に。「語部（かたりべ）」ともいうべき古老の話を聞き得ずに、永久に機会を失ったことは、かえすがえすも残念でならない。

二、茶屋のれん

「茶屋のれん」というおどりは、優雅で、他の盆おどりとは一寸趣きを異にし、舞に近いとも言われている。その音頭の歌詞には、近江八景や人形浄瑠璃の箱根霊験等諸国のものを取り入れているが、その中に、

間の山ではお杉とお玉　お杉お玉のひく三味線は
しまさんこんさんあさぎさん　云々

とあって、それが何の事を意味しているのかさっぱり分らなかったが、先般、偶然にもある作家の小説に、その事が詳細に載っているのを見て、はじめてその因るところが分った。

それによると、昔、全国的に盛んであった伊勢参宮の道中の女芸人のことで、外宮近くの町に入ると、街道の両側に薄べりを敷いて、薄化粧した比丘尼が座り、両手の中指にはめた鈴を鳴らしながら、

もうし縞さん　やあい紺さん
やてかんせ　ほうらんせ

と道行く参詣人に投げ銭を乞うたという。比丘尼といっても正真の撫肩の法城ではなく、容姿とは裏腹に、大道で遊芸を世過とする女達のことであり、「しまさんこんさん」とは、縞の着物を着た旦那さん、紺の着物を着た旦那さんという意味であった。

また、「間の山」とは、外宮と内宮の間にある山（尾上坂）ということから此の名がついた。その間の山にはお杉・お玉という二人の女が、幕を張った小屋で三味線をひき、間の山節を唄って、旅の参詣人の投げ銭を、三味線の手は休めずに打で受けとめたり、ひよいと身を躱したりして、客の目を愉しませたという。

以上のような次第で、このことはよく分ったが、私にはまだ「茶屋のれん」ということが分らない。歌詞には

茶屋ののれんはいろはにほへと
嫁や娘をみなひきつれて　云々

とあって、簡単なようだが理解できない。誰か知っていると思うけれど尋ねあたらない。そのうちに解明できる日もあろうかと、じっと時を待つことにしている。

三、心中口説の道行

今、柏江でおどっているのは、茶屋のれん・兵庫節・大文字（長音頭あるいは扇子おどりともいう）の三つでその大文字おどりの音頭は、お為半蔵心中口説きである。

これは、寛延二年（一七四九）五月に起きた心中事件を、見事な筆致で唄いあげたものである。

この口説について、今は世にない安藤正人先生は、巷に伝わっている卑俗な音頭とは別で、文芸的に見ても優れた作品であり、曽根崎心中の匂いもしているので、あるいはその系統の文士の手になったのかもしれない。この音頭の圧巻は何といっても道行であると言われた。

曽根崎心中は、元禄十六年（一七〇三）に世に出たもので、近松畢生の名文と称えられた。お初徳兵衛の道行は次のとおりである。

此の世のなごり、夜もなごり、死に行く身をたとふればあだしが原の道の霜　一足づゝに消えて行く夢の夢こそあわれなれ　あれ数ふれば暁の　七つの時が六つ鳴りて残る一つが今生の鐘のひゞきの聞きをさめ　寂滅為楽とひゞくなり

以下略

さて、本題のお為半蔵心中の道行は次のようである。

岸を離れて江頭来れば　今宵十日の月代さえも　西の尾上に早や傾きて　暗さも暗し後田の　此処を通れば思い出す。過ぎし五月の田植の頃は　村の娘子皆うちつれて　茜たすきのいと華やかに　菅の小笠の一揃い

以下略

もののよしあしも弁えぬ者が、批評めいたことを口にするのは憚られることであるが、強いて感じを述べるなら、前者には整然とした七五調の名文に魅了されて、倦むことを知らず。死に面した人の心を乱れを、あまりにも絶妙に詠嘆しているようである。

また、後者は、七七調七五調と不揃いであるが、過ぎた日への追憶を甘く感傷的に唄いあげている。しかし、紙背には十八の乙女の哀切な心情が滲んでいる。

四、堅田おどりの現況

今、堅田地区のどこの村でも、盆おどりに行き詰っているのは、三味・太鼓や音頭取りの後継者のないことである。ある村では柵に上がる人がなくて、鳴り物はカセットテープを代用したり、また、ある村では、三味線だけはテープで、太鼓や音頭は「生」でおどるというような方法を講ずる所もある。私の村なども、今はどうにか持ちこたえているが、来年のことは分らない。正に余喘を保っているという状態である。

下堅田地区には、区長会や婦人会を中心とする保存会が結成されているが、殆んど活動はしてなく、何年かに一度、小学校で地区の盆おどり大会を開くのが唯一の活動である。

幾年か前、ある村に熱心な指導者がいて、保存会を結成して活溌な運動を押し進め、ある時は東京にまで進出したこともあったが、今はもとにかえって、いずれの村とも同じような状態である。

こうした中にあって、小学校の五六年生を中心とした、堅田郷文化財愛護少年団が結成されて、堅田おどりについても取り組んで稽古などしてくれることは、大変喜ばしいことである。

おわりに

堅田おどりの源流を尋ねたら、京阪文化の流入もあっただろうし、また、歌垣風流の影響も受けているかもしれない。いずれにしても、堅田おどりは過去の時代から幾回となく受け伝えを重ねて今日に及んでいることであろう。この絆は私達も絶やすことなく、次の世の人々へ伝えていきたいものである。かくすることによって、過去の人々も現代の者も共に、次の世代の人々の心の中に生きて行くことになるのではないか。

このようにあってほしいと、私は願うのである。